

『風土記』をめぐる近世出雲と東海地方の文化人
～内山真龍・本居宣長を中心に』を聴いて

聴講日：H31.2.2
むきばんだやよい塾第19期

『出雲国風土記』とは

和銅6(713)年 元明天皇の詔に対して、① 諸国の郡・郷名に2字の好字で示すこと、② 郡内の産物、土地の肥沃、地名の由来、古老の伝える旧聞異事を報告することを目的として作成された『出雲国風土記』の原本は2巻の卷子本でした。天平5(733)年に出雲国造である出雲臣広島の監修のもと、秋鹿郡の神宅臣金太理の編纂により成立しました。現在では出雲を含む常陸・播磨・肥前・豊後の五つの風土記が現存していますが、ほぼ「完本」として残るのは唯一『出雲国風土記』だけです。

現存写本のルーツは？

『出雲国風土記』は写本として伝えられていますが、近世前期の写本には ①注記の混入と見られる謎の3行の存在、②秋鹿郡条と楯縫郡条の間に半丁分の空白(2巻の卷子本の痕跡)、③島根郡神社条の大半の脱落、④島根郡生馬郷と加賀郷条の混在、⑤島根郡多久川条の脱落、⑥秋鹿郡長江川条の脱落、⑦神門郡(宇比多伎)山条の脱落、という共通した七つの特徴があります。③～⑦の脱落部を後世に補訂した写本も存在し、脱落があるままの写本を脱落本、補訂してある写本を補訂本と言います。

13世紀後半のト部兼方の『釈日本紀』に『出雲国風土記』が引用されていますが、出雲で書かれてから約500年間の状況は分かっていません。『釈日本紀』からさらに約200年後の文亀3(1503)年に、吉田兼俱の『延喜式神名帳頭註』に『出雲国風土記』が参考されています。

『出雲国風土記』の最古の写本とされる細川幽斎の「細川家本」は、吉田兼俱からさらに約100年後の慶長2(1597)年に書写された徳川家康の「江戸内府本」を書写したものです。また、吉田兼俱の曾孫である梵舜を介して伝えられたと考えられる写本を、尾張藩主の徳川義直が日御碕神社に寄進したものが「日御碕神社本」となります。日御碕神社の恵光院順式は、この写本を林羅山に照覧いただいた折に、林羅山門弟の山鹿素行、脇坂安元、榊原忠次らがこの「日御碕神社本」を書写して京都や江戸、伊勢へと広まっていきました。

全国に広まった写本の祖本とされる「日御碕神社本」ですが、この写本の出雲内での書写は恵光院順式が没した後の代になってからのものです。出雲で日御碕神社本に次いで古い写本は郷原家本ですが、この写本は伊勢に伝わった中川氏本を書写したものです。

出雲大社寛文の御造営(1667年)では、仏教色を排して純神道式に改めました。伊勢遷宮の神道を参考にしようと伊勢の資料を集め、その中に中川氏本が含まれていたようです。出雲内の写本はこの郷原家本を起点として展開していきました。

『出雲国風土記』の研究書としては、松江藩神門郡奉行の岸崎佐久次時照が天和3(1683)年に著した『出雲風土記抄』が最初ですが、その後出雲内での研究はありません。風土記抄に次ぐ研究書としては荷田春満の『出雲風土記考』がありますが、一般的な注釈書とことなり、語釈や神の考察を中心にして研究したものです。次に挙げられるのが天明7(1787)年に著された『出雲風土記解』です。著者の内山真龍は、遠江国豊田郡の人で、風土記抄に依拠した地名比定と考証を合体させた点に重要性があり、出雲へ調査旅行した成果も踏まえて書かれていて、寛政4(1792)年には杵築大社に奉納しています。また、真龍と交流を深めた杵築大社国造家の千家俊信は本居宣長の門人となり、風土記解の成果もふまえた校訂本『訂正出雲風土記』を文化3(1806)年に出版しています。

小栗広伴旧蔵『出雲国風土記』をめぐる

この内山真龍が著した『出雲風土記解』は、『出雲風土記抄』以外に複数の写本を校合していますが、どの写本を底本としているかは不明でした。ところが後述する「小栗氏本」の奥書の検討から磐田郡・斎藤信幸の写本が真龍校正本の底本であることが明らかになりました。

また、近世において多数書写された『出雲国風土記』の大半は日御碕神社本と系譜関係をもつ写本であることが明らかとなっています。これに対して、細川家本・倉野氏本の系譜は明らかになっていませんでしたが、小栗氏本はこれらと同系統の写本と推定でき、これまで知られていない写本系統の存在が示唆されました。

小栗氏本の所有者である小栗広伴は遠江国豊田郡石原村(現在の浜松市)の人で、内山真龍の門人である石塚龍麿を師としています。造酒商の家で働きながら、和歌や国学を学び、実家に戻ると漆器業を営むとともに、国学歌人として遠江で賀茂真淵や本居宣長の霊祭などで重要な役割を果たし、遠江国学の人的ネットワークの中で生きた人物です。

遠江国学の祖は浜松諏訪神社の神官杉浦国頭という人で、荷田春満の門人です。荷田春満は京都伏見稲荷神社の神官で、将軍徳川吉宗から幕府書庫の紅葉山文庫本の鑑定などを命じられて、京都と江戸を往復していましたが、その途次にある浜松に逗留し、古典や和歌を教授していたのが遠江国学の始まりです。

国学の四大人の一人とされる賀茂真淵も遠江国学の流れの中にあり、はじめ杉浦国頭の私塾に学び、後に京に出て荷田春満に入門します。晩年にはまだ若い本居宣長と「松阪の一夜」で語り明かしていますが、この“出会い”が、『古事伝』完成へと向かわせたと言われています。

『出雲風土記解』を著した内山真龍も賀茂真淵の門人で、遠江国豊田郡大谷村の庄屋としての仕事の傍ら、『出雲国風土記』を研究、実地踏査をしています。参考とした『出雲風土記抄』は宣長から入手しましたが、それは伊勢神官の蓬萊尚賢を介して浜田藩医の小篠敏から入手したものであり、さらその写本は安芸吉田の清神社の神官である波多野為興から入手したものでした。松江藩で書かれた『出雲風土記抄』が安芸吉田に伝わった経緯は分かっていません。

内山真龍の門人は農民や商人が中心でしたが、その中には奈良時代の上代特殊仮名遣を発見した石塚龍麿や、後に天保の改革を勧めた水野忠邦の師である高林方朗などもありました。出雲国造家の千家俊信も『出雲風土記解』に刺激され、真龍の勧めで宣長に入門しています。そして、出雲でも風土記への関心が高まる時代背景のもとで、文化5(1808)年に書写されたのが小栗氏本です。

小栗氏本の奥書から

小栗氏本は、文化5(1808)年に久保長秋が山口久兵衛所蔵本を書写し、小栗広伴が所蔵したものであり、山口久兵衛所蔵本は、越前大野郡石徹白の白山中居神社神頭職杉本左近敬永の所蔵本を書写した写本を、明和6(1769)年に多々良頼宴と山口久兵衛が書写した写本です。

小栗氏本は文化7(1810)年に千家俊信の『訂正出雲風土記』で交合し、さらに文化13年に石塚龍麿から「内山翁校正本」を借り校合されています。「内山翁」とは、内山真龍のことですが、真龍が『出雲風土記解』を編集するに際し、如何なる写本を親本とし対校本としたかなど、判然としない点が多く残されていました。

小栗氏本には、『出雲風土記解』の成立に先行する「天明元年丑7月12日」の日付があることから、この「校正本」はこれまで知られていない真龍の手沢本として『出雲風土記解』の基礎となった写本であったと思われます。

さらには、この「校正本」の親本が斎藤信幸旧蔵本に相当すると考えられ、その「校正本」の対校本については、「山城伏見稲荷山神主東万呂考本」「三河国梁万呂本」「濱松天神町某本」「谷川士清之本」「伊勢内宮経雅之本」の五つの写本が列記されます。

小栗氏本と細川家本・倉野氏本の本文中の異動を調べると、本文中少なくとも74か所で確認できることから、小栗氏本はこれまで確認されていなかった細川家本・倉野氏本系の写本と言えます。また、河村家本と島根県古代文化センター本の付箋との対校でも小栗氏本とほぼ一致し、ともに細川家本・倉野氏本系の写本であることが分かります。河村家本とは尾張藩士河村秀穎が開いた「文会書庫」旧蔵書を中心に構成される河村文庫に収められた写本です。そして古代センター本の本文は日御碕神社本・榊原家文庫本系の写本と考えられますが、そこに付いている298枚の付箋に書かれた字句が小栗氏本と一致しています。

小栗氏本も河村家本も18世紀半ばの書写と推定でき、本文異同の親近性だけでなく、年代的にも近いと言えます。後に秀穎の甥の河村益根が著した『社盟詩載』に、敬永の曾孫か孫の杉本義宣が詩を寄せており、二万冊余りに及んだ河村家の蔵書からすると、小栗氏本の祖本は河村家に由来する写本と考えられるのではないのでしょうか。

出雲を旅した遠江の人びと

『出雲風土記解』の著者 内山真龍は同行者(小国秀穂、鈴木書緒、山下政嗣・政定親子、高林方朗)らと『出雲国風土記』本文の疑わしき所々を実地踏査し、国の形を見回って、昔と今の変化を調べています。同行者の高林方朗が残した旅日記『弥久毛乃道中』には、出雲での道中の様子が日を追って書かれています。

旧暦の2月15日の夕刻に米子に至り、神魂神社神主の秋上大祐と会っています。翌日は出雲郷まで到達し、戸田川が古の野城川であると『出雲風土記解』の独自解釈が記されています。

2月17日は出雲郷を出立し、熊野大社で昼食をとり、神魂神社に泊っています。『出雲風土記抄』には阿太加夜とされていますが、『出雲風土記解』では阿陀加夜となっています。翌日は神魂神社の神主秋上家に滞在し、松江藩士の福見三省と風土記について終日語るとあります。

神魂神社を出発してからは八重垣神社や玉作湯神社を経て松江城に、昼食後は山間を“古代の道”を比定しながら歩いて本庄で泊っています。本庄からは舟で美保神社に至っていますが、嵐に遭遇して途中から歩行に変えて本庄に戻っています。翌日の本庄から松江への山間の道は厳しかったようで、その日の記述は少ないです。

2月22日に松江を発って杵築に泊まり、翌日には杵築大社で高浜左仲と語りあい、稲佐の浜から日御碕神社をお参りしてまた杵築に戻っています。

2月24日を出雲での最終日として杵築を出発していますが、次の目的地である九州の記事へと続いています。